

## シンポジウム：臨地実習前の OSCE

## 1. 司会のことば

奥宮 敏可\*

OSCE (Objective Structured Clinical Examination: オスキーと呼ぶ) は、元々医学生が臨床実習を始める前に、学生の基本的臨床技能および態度を客観的に評価するために、1970 年代に英国で提唱されたものである。日本では 1994 年に川崎医科大学に初めて導入されて以来、他の医学部医学科や医科大学、医学部歯学科や歯科大学、さらに薬学部(6 年制)において次々と実施されるようになった。

現在では、その業務は医学部(医学科)・歯学部(歯学科)では社団法人医療系大学間共用試験実施機構に、薬学部(6 年制)では薬学共用試験実施センターに委託されている。さらに、現在の臨床実習前試験としては、OSCE に加えて基本的臨床知識の総合的理解度の評価として CBT (Computer Based Testing) も同時に行われることで、学生は基本臨床技能と知識の両面から全国的な基準により評価されている。現時点で 6 年制の医療系大学以外での全国的な基準はないが、4 年制の看護学科や栄養学科、理学療法学科等でも OSCE を取り入れている大学が増えてきた。

今回のシンポジウムでは、これらの状況を踏まえたうえで、臨床検査技師教育においても OSCE や CBT を取り入れることの必要性が叫ばれつつある現在にあって、既に取り組みを始められている教育施設(3 年制と 4 年制教育施設)と臨地実習先として学生を受け入れられている施設(大病

院と健診センター)で中心的に活躍されている、以下 4 名のシンポジストの先生方にその現状と将来展望をご講演頂いた。

まずは教育施設側からのご講演として、3 年制の教育施設において、タイトなカリキュラムの中で OSCE の導入を試みられてきた川崎医療短期大学の所司睦文先生(現 九州医療福祉大学)に生理機能検査実習を例にお話し頂き、次に 4 年制大学として平成 28 年度からのカリキュラムへの OSCE の正式導入を前提として、平成 24 年度～26 年度にかけて実施されたトライアルの結果報告と今後の改善点等について藤田保健衛生大学の雪竹 潤先生にお話し頂いた。

学生を受け入れる臨地実習施設側からのご講演として、信州大学病院検査部の川崎健治先生には、大学病院における生化学・免疫血清検査部門での臨地実習の現状と将来展望に関してご報告頂き、社会医療法人財団 慈泉会 相澤健康センターの宍戸淑子先生には、健診センターにおける生理機能検査(特に超音波検査)に関しての臨地実習の現状と将来展望に関してご報告頂いた。

講演の後には活発な質疑応答が行われ、今後、臨床検査技師教育施設での OSCE 実施に向けて解決しなければならない重要な事案が以下のごとく幾つか浮き彫りとなった。それは、1) OSCE 実施の前に全国共通の基本的コアカリキュラムの整備の必要性、2) 現状では、実施内容は患者様に直

\*熊本大学大学院生命科学研究部生体情報解析学分野 okumiyat@kumamoto-u.ac.jp

接する生理機能検査や採血等が中心であるが、  
今後は臨床検査業務の大半を占める検体検査等も  
巻き込んでいく必要があること(すなわち「出来る  
内容」から「やるべき内容」へのシフトが必要)、  
3) 学内実習と臨地実習の整合性を見直す必要  
があること、4) 3年制教育施設と4年制教育施  
設の学習到達目標の設定をどのようにするか、5)  
臨地実習を「見学実習」から「実務的で手を動か

し頭を働かす実習」へ移行させるための戦略的方  
策の必要性等々である。

今回のシンポジウムでは、OSCE という 1 つの  
教育方略を通して、臨地実習をより実りあるもの  
にしていくために、臨床検査教育施設と臨地実習  
施設が協力しながら解決していくべき現時点での  
問題点や、今後展開すべき教育改革の必要性を改  
めて再認識させられるものとなった。